

翻刻『ちとせの舎御せうそこ』

野 本 瑠 美

(島根大学法文学部)

安 田 はるか

(島根大学大学院人文社会科学研究所修了)

摘 要

手銭家七代当主の妻・さの子が、千家尊澄ほか数名の書簡を写し集めた『ちとせの舎御せうそこ』を翻刻、紹介する。

キーワード：消息、手銭さの子、千家尊澄、手銭記念館

解説

出雲市大社町の手銭家が所蔵する『ちとせの舎御せうそこ』は、手銭家七代有頼の妻・さの子（一八二三～一八六二年）が千歳舎、千家尊澄（一八一〇～一八七八年）と思しき人物の消息（手紙、書簡）等を写したものである。

手銭さの子（注1）は今市の直良家の出身で、文政九年（一八二六）手銭有頼に嫁いだ。中臣正蔭や田中清年、富永芳久らに和歌や俳諧、狂歌を学び、安政三年の『丙申出雲国三十六歌仙』等の作者となり、翌年の『丁巳出雲国五十歌撰』で跋文を執筆している。さの子の和歌や俳諧等の著作、さの子手沢本は手銭家に数多く残されている。

千家尊澄（注2）は、国造千家尊孫の嫡男として生まれ、第七九代国造を務めた人物である。好学の人で、千家俊信（一七六四～一八三二年）に入門、俊信没後はその門弟であった岩政信比古（一七九〇～一八五六年）に師事し、さらに本居内遠（一七九二～一八五五年）や中村守手（一八二〇～一八八二年）にも学んだ。和歌、文筆に優れ、歌論書『歌神考』、歌文集『松壺文集』等を著した。

手銭家所蔵『ちとせの舎御せうそこ』は、二六通の消息の写しである。外題に「ちとせの舎」とあるが、尊澄以外の消息も収める。筆跡から、同一人物（手銭さの子と思しい）の手による書写であるが、一面行数は不定で、一部筆致の変わる部分もあり、幾度かに渡って書き

継がれてきたものであることが推測される。以下、各消息に便宜的に通し番号を付し、端作を有する場合はその全文、各消息の冒頭数語、差出人や宛先が記されている場合はその情報を掲げた。

番号	端作（消息末尾の日付）	冒頭部分	差出人↓宛先
①	雪のあした人のもとへ	けさの雪に	
②		庭もまがきも	
③		此ごろのながめ	
④		庭もがまきも	
⑤		こまやかなる	
⑥		けふも野分	
⑦		のたまへるやうに	
⑧		けふしもすなどりに	
⑨		おかしき御ほんこと のは	
⑩		空のけしき	
⑪	年はじめに人のもとへ遣し けるせうそこぶみ	年たちかへる	
⑫	若菜を人の元に遣しける時 そへて遣しけるせうそこぶ みになぞらへかける	この比は春ともしらす	
⑬	おなじく返事	春さむく	
⑭	花のさかりに人のもとへ遣 しける	このごろの野山	
⑮	人のもとへ紫文消息をかり に遣しける時	けふは冬めかしう	

番号	端作（消息末尾の日付）	冒頭部分	差出人↓宛先
⑬		よべはこよなう	
⑭	人にかはりて富永芳久のう えに遣しける	此ごろのて	（某人の代作） ↓芳久
⑮	おなじ人のもとへ遣しける	前なる小松	（某人）↓芳久
⑯	早わらびつみにものせんと て友のもとへ遣す	四方の木末も	
⑰	足立重茂にかわりて富永芳 久が元へ	此比は風いみじう	（重茂の代作） ↓芳久
⑱	むつき	つきせぬ御ことぶきも	
⑲	きさらぎ／さきのかへし	きのふけふは	
⑳	やよひ	いかにみこ、ちは	
㉑	安政五年五月斗り芳久大人 の元へ遣しけり（五月九日）	鶯の初音	さの子↓ 芳久
㉒	おなじく返事（九日）	梓ゆみ	芳久↓ さの子
㉓	おなじ比よしのぶ君の元よ り（十二日）	いぶせかりける	よしのぶ ↓さの子

二六通の消息のうち、①～⑬と⑱、⑲～㉓には、差出人・宛先は記されていない。⑬⑭⑮は差出人不明だが芳久宛のもの（うち⑮は某人による足立重茂のための代作）、⑲～㉓のみ差出人と宛先が明示されている。『ちとせの舍御せうそこ』という書名から、差出人を明記しない書簡は千家尊澄の書簡と想定されるが、確証はない。だが、以下のような記述からは、尊澄を差出人と見なせよう（注3）。

けふは家大人の御まつりなれば御まへに文こと葉をさ、げまつる

(2)

けふはうしの御まつりなれば、またしもふみつくりてたてまつる

(3)

のきばの松のすぎがてに、ちとせのやをとひたまひてよかし

(3)

けふはれいの御まつりなれば、ちとせのやの小床に師の君の御

像をかけはべりて、おろかなるふみこと葉をたてまつる(10)

□部分から差出人が自宅を「千歳舎」と称していること、傍線部分から千歳舎で俊信と思しき人を偲ぶ行事を催行していることが窺え、差出人は尊澄と考えて良いだろう(注4)。島重老(一七九二～一八七〇年)へ歌を(5)、岩政信比古に消息等を送っている(6)(15)点も、尊澄の経歴と矛盾しない。ただし、(24)～(26)は手銭さの子と富永芳久、よしのぶの間で交わされた消息の写しであり、少なくともこの三通は尊澄とは無関係である。

本書で年時が明記されているのは(24)の消息(安政五年五月九日)のみで、(24)の返信にあたる(25)、「おなじ比」の消息(26)も同年頃と推測される。これにより、本書の成立は安政五年(一八五八)以降と目される。(24)～(26)以外の消息の制作時期は不明だが、(6)(15)(20)に岩政信比古のやりとりが窺えることから、俊信が没した一八三一年以降、信比古が没する一八五六年以前に交わされたものと推測される。

手銭家には『ちとせの舎御せうそこ』の他に『かたがたのせうそこうつし』と題されたさの子周辺で交わされた書簡を書写したものが伝存する。本書(25)の消息は『かたがたのせうそこうつし』にも同文が収められている。また、さの子の消息下書を収めた『心中心おほへ』、

一枚ものの消息写し等も手銭家に所蔵されている。これらの書簡については、田中則雄氏(注5)や芦田耕一氏(注6)によってその内容の一部が紹介され、さの子の歌文の創作やそのための学び、さの子周辺での文芸をめぐる遣り取りなどの様が窺えることが指摘されてきた。江戸時代後期における手銭家及び大社圏における文芸交流の実態を探るうえで、本書は極めて貴重な資料であると言えよう。

なお、本稿の翻刻は主に安田が担当し、解説・書誌・凡例及び全体の統一は野本が担当した。

注

(1) 手銭さの子の事蹟については、下記の論考を参照した。佐々木杏里「手銭さの子と杵築文学」(『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、二〇一〇年)、田中則雄「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」(『調査研究報告』三三三、国文学研究資料館、二〇一二年)、芦田耕一「江戸時代の出雲歌壇」(島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一二年)、佐々木杏里「手銭さの子と女性の文芸活動」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、二〇一八年)等。

(2) 注(1) 田中論考、芦田著書、中澤伸弘『徳川時代後期出雲歌壇と國学』(錦正社、二〇〇七年)、同「出雲歌人の歌書・歌集の出版活動」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、二〇一八年)等。

(3) 以下解説で引用する本文は、読みやすさを考慮して翻刻本文に濁点を付した。

(4) 消息(17)には「我ちとせのやの君の御もとに、きのふは御とぶらひ給ひしよし」とあり、尊澄を第三者の立場から描写するが、端作に「人にかはりて富永芳久のうえに遣しける」とあることから、尊澄に代わって某人

翻刻『ちとせの舍御せうそこ』（野本瑠美・安田はるか）

が執筆したとすれば矛盾はない。この消息について、前掲注（1）田中論考では、尊澄に代わって手銭さの子が執筆したものと推定する。

（5）注（1）田中論考

（6）芦田耕一「大社地方における文芸環境―「まとも」を中心にして―」（『島大國文』三四号、二〇一四年一月）

書誌

手銭家所蔵／写本仮綴一冊／函架番号 六〇八／一八・六×二五・五
種／表紙は付けられておらず、第二丁オモテの右に内題「ちとせの舍御せうそこ」を記す。／全二五丁／一面の行数は不定で、おおよそ一三〜二〇行。

凡例

- 一、翻刻にあたり、私に句読点を補った。また、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。
- 一、便宜上、各消息の冒頭に通し番号を丸数字で付し、各消息の間は一行空けた。
- 一、改行位置は可能な限り原本の通りにした。原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。
- 一、ミセケチ記号は「ヒ」で示した。
- 一、墨消ちは、下の字が判読可能な場合は二重線で示し、判読不能な場合は■で示した。重ね書きは、下の字が見える場合は上の字の翻刻のあとに「」で示した。傍記や補入、空白箇所については、

- 一、虫損などで判読が困難な箇所は□で示し、予想される字を（）内に示した。

翻刻

ちとせの舍御せうそこ

①

雪のあした人のもとへ
 けさの雪に、冬こもりぬる松の戸をひらきて
 みれば、こゝろきも、つふる、やうになん。
 せんさいの木立のえたもたわゝにふりつもりて、
 園生の外はいみしう雪折のして、
 山のたゝすまひまでをちなき身にたにおか
 しうみ給ふるに、君にはあたらしくつくり
 出給ひし御地なとにかにみはやし給ふ
 らむとおもひやられて、とくも御まへにさも
 らふへくとおもひ給ふれと、猶ふる雪に
 ふすまもさえとほりて、うつみ火のもとにか、
 まるをやくにてえおもひたゝぬを、くち■
 しくてかくなん。あなかしこ。「（1丁オ）

② 庭もまかきもふりつみたる雪なれと、

木々のたゝすまひはけふしも猶あかれぬを、
君にはいかに見はやし給ふらん。みけしき
うけたまはらまほしくなむ。さて、けふは
家大人の御まつりなれば御まへに文こと葉を
さ、けまつるを、君にもとく／＼ものし給へ
かし。なをかめにも花をさゝせたまはんことを
ねきこふまゝ、草のいほりをとひ給はんこと
をなんひたすらにこひ侍る。さていみしう
こゝろあはたゝしきことのありて、筆の
みたれかちなるをゆるし給てよ。かしこ。

③ 此ころのなかめとはことさらひて、山の
たゝすまひ、前さいなともいとみところ

□(な)うなりにたるを、君にはいかにものし 「(1丁ウ)

□(給)ふらん。みけしきうけたまはらまほしう

なん。さて、けふはうしの御まつりなれば、また
しもふみつくりてたてまつるを、君にも
おかしうものし給ふらむ。のきはの

松のすきかてに、ちとせのやをとひたまひ
てよかし。はた、君のもたまへるたにさく
かけといふものを松の木のはしらにかけ
侍らむとおもひたまふるまゝ、小舎人にこと

おふせつれば、くはしうはそれにゆつりて
なん。あなかしこ。

④ 庭もまかきもふたへなるけさの詠め、けに
いはんかたなくおかしうなん。雪は所を
わくとなけれど、心ある人はいかに見はやし
給ふらむとおもひやりきこへせんと
するに、わりなきことゝものありても
たせるに、ふりはへてめもあやなる御
ことの葉に、みきりの雪にひかりあふ
こゝちし侍れば、御かへりこともえき_ま中_ま不_す
つかうまつらす侍るを、さりといふ
かひなくおほしめすらむとおもひ給ふ
るまゝ、のたゝことをかきつけ聞へさするは、
いと／＼をこかましうなん。

⑤

こまやかなる御ふみたまはれるは嬉しとも
うれしうなん。のたまへるやうに、野分の風
いとすさまじう吹はへるを、君にはいか、

□(御)らんし給ふらむ。いとほたさむくなん
□りける。さて、さいつ比より風のみこゝち
にてもものし給ふよし、みけしきも

うか、ひきこへすはへるを、むら_ひつみは

「(2丁オ)

「(2丁ウ)

ひろき御心にゆるし給ひてよかし。けふは
おこたり玉ふよし、いみしう嬉しく
なん。さてひと日、哥の題をたてまつりみ玉しに、
かすおほきをもいとひ給はて、残るくま
なくこよなうおかしくもよみつらね給ひ
ておくりものし給ふを、みもてゆけは、めも
さむはかりおもしろくうけ給はり侍りぬ。
さて、さいつころ嶋重老^{じまのちか}かもとへつかはし
おきし歌のまき、よへこ、にかへしたま、
御かへりことにそへてたてまつり侍ぬれば、
御めにふれさせたまひ「へ」てよかし。萬はたい
め玉はりてなん。

⑥
けふも野分すさまじう吹わたれば、野
山のけしきも冬めかしうなんなかめられ
ける。さて、君には日にそへておこたり給ふ
らんと思ひ給ふになんありける。のちほとに
みけしきうか、ひに御もとのものせん
かし。さては角さふ岩政かたへ、た、ん月
に遣してんとおもふおろかなるおのかふみ
こと葉かきした、めて御らんせさせ侍りぬ。
御目にふれさせ給は、ほいにかなひぬ
へくおもひたまふるになん。また、まうす
□(へ)きこと、もはおほく侍れと、さしいそきてなむ。 「(3丁ウ)

⑦
のたまへるやうに、いみしう夜さむになり
侍りぬれば、野辺のむしの音はひまもなく
きこへて、いとくあはれなるころほひになん
なり侍りぬる。君の侍かこと、かうやうの折に
うたよみたらむにはこよなかるへし。
さて、あはれふかきことの葉もいてぬへく
なん。いろかひぬ御そうしにて、うたのまと
ゐをものしたまはんとて、ふりはへての御こと
の葉くはしう承り侍りぬ。おほせことなく
ともさもらひて、むかし物語も聞へさせんと思
たまへなから、れいのいたりすくなき身に
し侍れば、ものまなひにひまなく、さり 「(4丁オ)
さりかたきことあれは、いま少し待給ひてよかし。ひる
はかりに御もとにまうて侍らん。さおほし給へといふ
ことをくりかへしいふは、とく御まへにまうてかたけ
れはなり。さて、御かへりことのひまいらんにはなめし
とて、とりあへす筆にまかせてものしはへれば、
ひかことのみいみしうおほく侍るへし。むらいの
つみはれいの御ゆるしをなんとて、御つかひのあかしに
とらせたるになん。かしこ。

⑧
けふしもすなとりにものしたまはん御ともに、お
のれもつかうまつるへきよし、ふりはへてのた

まひおこせつるはうれしと聞へさせむも、世のつねになん。さて、さりかたきことのありてえ御もともつかうまつらぬを、いとくちをしうなん。のたまふことく、かせいとたさむくみにし
み□(け)るを、君にはこよなうまめやかにものし給ふよし、くはしうみけしきうけ給はりて、い見しう嬉しうなんおもひ給ふる。けふもなをれいのふみみることにいとまなくて、みけしきうけたまはりにもえまうてはへらぬを、いとくなめしとおもひたまはむかし。猶よろつはさもらひてなん。

⑨ おかしき御ほんことのはのおむかしさに、けにこのころのけしきはみすくしかたきこ、ちせらる、を、こゝろある人はいみしうなめ給ふらむと思ひ玉ふるまゝに、いとくゆかしうなん。五月雨のそらならねとも、かくふりつゝきては、いみしういふせくなん。つれくくなるまゝに、れいのゆみといふもてあそひものもたへて久しくなんなりにける。さて、君のおほん水くきに、かの源氏の君の六条の御息所の御もとに「(5丁オ)かよひ給へし時のおもかけにも似侍らんと、いとくおむかしくて、御かへりこともえかきやらて、た、ことをかくなむ。

⑩ 空のけしき少しはかはりぬるを、なを日にそへていとくさむくなり侍りぬるを、君には風のみこ、ちにてやみ給ひしを、おこたりたまはんとなんおもひ給ふる。さて、けふはれいの御まつりなれば、ちとせのやの小床に師の君の御像をかけはへりて、おろかなるふみこと葉をたてまつるを、きみにはいかにものしたまふらむ。つくらせたまは、ひとつてにおくり給ひてよかし。さて、めてたきことほきのもちひたてまつり侍れば、御かへりことには御歌をよみそへたまはんことをなん、ひたすらにこひは□(へ)□(る)。さて、しりへにはれいのあなかしこ「(5丁ウ)

⑪ 年はしめに人のもとへ遣しける
せうそこふみ
年たちかへるあしたの空のけしきは、まことにいはんかたなくおかしうなんなめられ侍る。千とせの春をかけたる御ことほき、いかにいみしうものし給ふらむと、いとくめてたくなん。ことしも春のかすみのへたてなう、御ものかたりうけたまはらまほしう、かつは、初春の御よろこひ聞へはへらむ。さては、鶯のはつねめつらしく、梅もほころひそめゆき、局の草わかやかにもへいてたるなど、こよなう長閑になりにて侍れば、子日にてたまはは「ん」、御もとにさもらはほ

しくなん。君にひかれてと野への小松も出給はんを
待はへらむかし。くはしうはまうてはへりてと
大かたはかきもらしつ。

⑫

若菜を人の元へ遣しける時そへて遣し
けるせうそふみになぞらへかける

この比は春ともしらすさへかへりぬるを、君には何ことか」(6丁オ)
おはしますらん、うけ給はらまほしうなん。また、
うつみひのもと、もさらて侍りしを、さりとして
やはとおもひおこして、春ともいはず、ふる雪に
ぬれくも野沢にたちいて、からましてつみいてたる
を、いさ、むら竹いさ、かまゐらするになん。さて、か
しこけれど、我衣手にと何かしのみかとのよませ
給へる大御歌さへおもひやられて、おのか身にこよなう
おもた、しうなん。なを、萬はたいめたまはりてと、
すへては残しつ。

⑬

おなしく返事

春さむく白妙にふりつもれる雪をいとひたまた
はて、野沢に出給へてつみ給へるねせりをおくり給へ
るは、こよなう嬉しうなん。まことや、かのみかとの御
こ、ろさへくみしられて、いみしうなん。我かりこそ
春のこ、となきに、千よいはひたるものをたてまつらんと

おもひ□しを、かへりて御かへりことつかうまつるは、いと」(6丁ウ)
くお□(も)なきわさになん。さては、あす、野辺の雪
かきわけても子日の松をひき侍らん、と心よそひ
しはへれは、君にもものし給はんや。もし、いて給
はずは、千代のためしに何をひかむと、いとくひん
なうはへらんかし。なほ、ゆふつけてみけしき
うか、ひにまうて侍らんかし。

⑭

花のさかりに人のもとへ遣しける

このころの野山のけしきに、いとみすくしか
たう、いつこもく花のさかりなれば、おもふとち桜かさし
といふらんやうに、春の山辺にましりなんと思ひ
給ふる。君にはいかにものし給ふらむ。いとゆふのいと
まのひまおはしまさは、いてたち給ひてんや。御ともに
さふらはまほしう侍れば、かならずくおくらかし
たまふる。さてもいつはかりとかおほししたため給ふ
へき、うけ給はらまほしうなむ。おのか園生に一本」(7丁オ)
さくらははるに、今をさかりなれば、こ、ろにく、
かすめる月かけの匂ひあひたる、けににるものな
きけしきになんはへる。君の御にわに、としくに
うゑそひ給ふなるは、いかにおかしう咲まさり侍ら
ん、とおもひやり聞へさするに、さりかたきことのありて、
いま、てえまうてぬはくちおしうなんある。猶、
四方の木末の今をはるへとさかりみちたるに、み

な白雪とのみあやまたれ侍る。か、れはこそ、いにしへ人も雲とのみなかめらるゝとはよみたまひけん。かゝる折に、つれ／＼とよもきふの宿にわひこもらむはくちをしくて、くりかへし御ともにさもらはまほしうなん。おろかなるふみこと葉もてことのよし、いさゝかもらし聞へはへる。なほ／＼よものこすへのおかしう霞わたれるかみすくしかたくて、かつはおとろかしまをすになん。こまやかなること、もは、ゆふさり御もとに」(7丁ウ)

□□□てむ時にとて、あなかしこ。

⑮

人のもとへ紫文消息をかりに遣しける時
けふは冬めかしうかせさへてわたりて、あられなどのけしきもよほしかほなるは、春ともしらぬ心地せらるゝに、君にはたひらかにものし給ふよし、うれしと聞へさせむも世のつねになん。きのふはたいめたまはりて、おかしき御ものかたりうけ給はりしは、いみしうなん。さては、としのはしめの哥まともものしはてたれは、少しはこゝろのとまるやうにはへれば、四気のせうそこふみをかきはへらんとおもひたまうれは、君のもたまへるををしはしきたまひてよかし。たゝん月には、おのかせうそこめきたるものを、岩政のもとへ遣してんとおもひ給ふるまゝ、とく／＼なむたのみ聞へはへる。さて、此ころはち、君の外にもものしたまへは、君にはことおほく

ものし給ふらむとはおもふものから、とみに聞へ」(8丁オ)
さするはいみしうなめしきことになん。

⑯

文こと葉のまとるをものせんとて
おなし人のもとに遣しける

よへはこよなう風さえわたりし「て」は、けにさることになん。今朝の雪■つまとおしあけてみれば、今はた冬のこゝちしていみしうなん詠められける。はた、いとよくはれたる朝日のかげに、匂ひあひたるけしき、花ともみへておかしうなん。きのふは、哥のまとるのはしめにて侍りしかは、おもしろき御ことの葉ともをうけたまはりて、けふも猶くりかへしすしはへる。さて、れいの文詞のまとるをものせむとおもひ給ふれば、けふあすのうちに御もとにまうてはへらんとこゝろさし侍れば、春のかすみのへたておはしまさて、御かへりことに御おむきのほとを書つらねたまひてよかし。萬は御もとに参りてとかきとめつ
ま□□きて、けふちとせの舎にてもものせんとは思ひ」(8丁ウ)
給□(ふ)れと、おはせんことのかたければ、かしこけれとおして御許にまうてはへらんとはきこゆ「へ」るになむ

⑰

人にかはりて富永芳久のうえへ
遣しける

此ころのていとはやうかはり侍りて、風のいみしうさむくなり侍りぬるを、君にはいかにものしたまふらむ。み

けしきうけ給はらまほしうなん。みちのくのをたへの橋ならねと、たへて御とふらひもものし侍らす過ぬるを、そはれいのひろき御こゝろにゆるし給ひねかし。

かつは、ほゑむ梅に雪のいとうふりかゝり侍りて、おろかなる身におかしう詠られて、れいのおかしからぬゑせ哥をうちすし侍るを、君にはいかに

みやひかになかめ給ふらんと、いとくゆかしうなん。さて、くりことのやうには侍れと、埋火のもとにかゝまりをるをやくにてすくくともえいてたゝす侍れは、お

ろかなるふみ詞をもてまをするになん。そは我 「(9丁オ)ちとせのやの君の御もとに、きのふは御とふらひ給ひしよし、さりかたきことの侍りて外にものしたる

ほとにて、たいめたまはらざりしは、いとくちをしうなん。名たゝる内遠諸平のたにさくふたひらまでたてまつり給ひしを、いみしうめてさせ給ひぬ。

そのよろこひをくりかへしませ、とおほせことかゝりぬ。はた、君のもたまへる古事記、

玉たすきの二典を、わか君見たまはんの御こゝろさし侍れは、しはしかしたまひてよかし。此ことくりかへしのみ申はへる。さては春もちかくなりにて侍れは、

としのいそきは朝もひるも物さわかしく、こゝろあはたゝしければ、かみのくたりのふみ詞はいとくどみにものしはへれば、なめけなることもおほかり

ぬへし。萬はたいめたまはりてなん。

⑱ おなし人のもとへ遣しける

前□(な)□(る)小松のいはひも時過にたれば、かきもらしつ。」

(9丁ウ)

日にそへて長閑になりゆくそらのけしき、はた、うくひすのとりくゝにゑみひらけたる梅かえに

鳴わたるなど、いみしき見所おほき春になん。さるをけさしもめつらしく雪うちつもれるはおかしうなかめらるゝに、あは雪のあはくしければにや、ほとなくきえ行野辺のけしき、日かけの跡さへみ

へて、いひしらすおもしろきを、君にはいかに詠給ふらん、こよなうゆかしう「く」なん。さて、年あらたまりても、何くれとことしけて、御けしきうけ給はりに

もえまゐらて、ふるとしの御物語きこえうけ給はることもなければ、おほつかなくてなん。君には、ものまなひもやいそしみ給ふらむと、いとくうらや

ましうなんおもひ給ふる。さて、ふるとしに我君のかりたまひし古事記 かへし給ふによりて、

小舎人してまゐらするになむ。かつ玉たすきは、前のまきふたとち、あとよりまゐらせんときみののたまはせたるゆゑ、そのまきにそへてみたまはん

とて、こたひはと、め置たまひつ。首のふた巻は他所より御もとにかへりなは、しはしかし給ひてよかし。

「(10丁オ)

このむね、かへすくもかたらひきこゆへきよし、
ことおほせ給ひぬ。よろつはまゐりてこそ、と書
もらしつ。さてしりへにはれいのあなかしこく。

⑱

早わらひつみにものせんとて

友のもとへ遣す

四方の木末もいみしうおかしく霞わたりたれば、明日は
この北山にわらひつみにもせんとおもひ立はへるを、
君にもものしたまひてんや。き、す鳴むかひの園の松
かけにさへ、きのふけふわらひ折子のかよへるを見れば、
長閑に霞わたれる山のはいみしからむとなんおもひ

給ふる。かたみなどはと、のひものしたれば、まゐるへき時は
きこへはへらんそかよそひをものしたまひてよ。花

はまた咲いてねとも、かつは、こゝろやりにし侍れば、わり
こさ、えなどはいさ、むら竹いさ、かものせんとおもひ
給ふれば、君は琴とふゑとをもたせ給ひてよかし。

あそひ友もひとりふたりはくし侍らむとおもへは、いま

より心うきたるやうになん。君のいみしきもの、音きかん
もおか□(し)□らむ、といとく嬉しうなん。猶、時うつり

ぬへければ、松やうのものもたせ侍れば、こゝろのとか」(10丁ウ)

□あそひ侍らむかし。よろつはその時にとて、こまやかな
ること、もはそれにゆつりて、こゝにはもらしつ。

⑳

足立重茂にかわりて富永芳久か元へ

此比は風いみしうさへわたりて、空さへ冬めかしう

折しくれ侍りしに、やうく長閑になりて侍るは嬉しう

なん。さては、こまやかなる御ふみたまはりしは、きえ残るたる

みきりの雪にひかりあふこ、ちして、いみしうめつらかになん

うけ給はる。とみにも御かへりつかうまつるへうおもひはへりしこと

折ふし、我君には梅の舎の君の文詞のまゐにもものしたまへ

るゆへ、みけしき給はりてこそと思ひ給ひしかは、きのふはえ

ものせず侍りしを、いかなめしとおもほすらむ。このほとは風

の御こ、ちにてなやみ給ふよし、御とふらひにもものせさりし

はつみさり所なうなんおもひ給ふる。けふは、おこたり給ふにや

うけ給わらまほしうなん。はた、た、ん月には岩政ぬしの御元

に秋の草のくさくさいふかしきこと、もとひに遣して

む、と我君おほせことはへりぬれば、さおほし給ひてよかし。

猶むねといひおせ給ひしことを、かみのしりへにこたへはへ

らむはかしこけれど、いさ、かいらへ侍らんとす。そは故梅の舎大人

のあらはし玉へる御ふみともを見たまはんとの御心さし、いみしう

たふとくなん。かの信比古君の御もとにさへはるくとふらひに遣ししをか

くはしう承りて、御こ、ろさしのほとをかへしたてまつりぬ。我君

の御ふくうにもたせ玉はねとも、梅の舎のにはありてふよしなれば、こま」

(11丁オ)

やかにとひ給ひてまゐらせん、とおほせことか、ふりぬ。うすの舎

かもとなる古史成文古史徴ともに六とちうけとり侍りぬ。は

た、としの暮にもせさせ給ひし御ことのはに、我君にもいみ

しうかんせさせ給ひ、おちなき身にたにおかしうもあはれにも、くりかへしすしはへらるゝになん。いさ、か長哥めきたるもの、文詞やうの物、ひとつふたつかいつらねて御らんせさせはへるやうことおほせ給ひぬれは、御しうよりぬきいて、送りまゐらす。へたておほしまさて、筆くわひたまひぬかし。あなかしこ。

⑳

むつき

つきせぬ御ことふきも、とくこそきこへさせ侍るへきを、しはしおほやけことしけからんほとをすくしてと、けふまでになりたり。いてや例のいはひ詞は、つる亀も猶あかねは中々にてなん。としのあらたまりては、いと、うちわたり、なまめかしう、神代のまゝのおきてたかはて、おこそかならんこそおしはかりたるも、かたしけなけれ。さるは、あまたの女房たち、うへの裳、御かたゝのも、此比はいと、よろつに花をおりてさしそきつゝ、かけまくもかしこき御まへともにさしつとひ給ふらむ。内々の御ありさま、いかにみるかひあらんと、御せちゑ男踏哥など、世にのゝしるにつけても、かきりなうゆかしう、哥にのみきくしきを、朝夕にたちならしたまふらん御身のすぐせこそ、うらやましけれ。ひと日、あをうま見んとていさなふ人侍りしかと、とし比ひなのすまひにうもれ侍りければ、ゆくりなくさしけんことのか、やかしさに、「(11丁ウ)くちをしうおもひとまりにけり。いかて比ほと過し給ひて、のとかなるをりあらんに、かならすまかてたまへ〔ひ〕かし。ゆかしき御物語もきこえ侍らはや。さてこそ春のこゝちもせ

め。たゝる中たちたるまかきのうめの、や、けしきたち侍るにも、おなしくはちらぬさきにと、使の風にも伝へまほしう、鶯はものかは、まちきこえ侍り。かしこ。

㉑

きさらき

さきのかへし

きのふけふはきさらきの名もしるくさえかへり侍るを、こよなくおはしますやと、かきくらす雪気のそらにもいとおほつかなさもよほし侍りてなん。まことに、いにし月はめつらかなりし御せうそこ、はつねまちえしこ、ちにもまさりておほえ侍りしを、女叙位女王祿など其事となうものさわかしきほとにて、さらにわたくしのいとまなう、せんしかきはいかてかわと、かへりほと過侍りしは、なめしとやおほすらん。けによにふりたる千とせ萬世も、此ころはましてつきなきほとになりたれは、このおこたりもなにも、いまみつからまかて、こそきこえたてまつらめ。さるは、とはせ給ふなる、雲のうへの御ありさまは、けにきこえやるへき方もなう、此ころはまして、萬にはえゝしき事のみに侍るを、なに事もいふかひなき身には、かゝるましらひもまはゆきやうにて、「(12丁オ)のとかならん御すまゐ〔ひ〕こ〔も〕そ、かへりてうらやまはへれは、そゝのかしたまはても、をりゝはまかてつゝ、人の国のおもしろき所々、めつらかならん海山の御物語もきかまほしうおもひわたり侍るを、あやにくなるあ

しはけをふねそくるしきや、つけたまへるまかきの
梅も、今やさかりならんとおもひやられて、此こ〔の〕ろは、夜
のまの風もうしろめたう、かをたに残せとはおもひのと
めかたう侍れは、あなちにもいとままちつけて、二日三日
のうちに、かならずものし侍るへし。よろつたいめの
をりにとてなむ。

②3

やよひ

いかにみこ、ちはさわやきたまふや、なをおなしさま
とのみきくこそおほつかなけれ。しはしの里居たに
さうくしくおほゆるを、今はおよひもそこなはれぬへ
き日かなにも成にたりや、ひと日のもとへ春の行へ
もときこえたまへりしは、けにさもこそと心くるしう
そおもうたまへ侍りし。こゝには、れいのこれかれこの
うらゝなる空のけしき、ふきくる風もたゝな
らぬに、かの飛鳥山てふところをわりなくゆかしかり
て、千とりならて飛たちぬへくおもほゆるさまとも
ものものくるほしきものから、をかしうて、さは家つとに
花のみはいなはえあることの葉そひなはとてゆるせ
しかきのふしのひて六たりはかりわらは、しもつかへ(12丁ウ)
など、さものしつらん。かゝるにつけても、をりあしきなや
みを、たれもくくちをしかりきこえ侍り。よへいぬときすく
る比なん、からうしてへりにきみなならはぬ山ふみ
につかれたるは、けにあし引こそ枕ことばなれ。

翻刻『ちとせの舎御せうそ』(野本瑠美・安田はるか)

ゆるせ心地はいとほりかにて、いまでも猶めてくつかへり
つゝ、花のいろはさらにもいはす、すへてをちこちのなか
めたくひなく、雪の外なるつくはの山も、手にとる
とるやうに見へ、ふた国の中なる川もに、とこの
ふもとをゆくなどかたるを〔に〕きくに、われさへあく
かれぬへきこゝちするを、ましていかはかりか
おもひたまふらんとおしはかりぬ。やまつとの桜、
つはなすみれなど、これかれおくるよしいふ
に、みつからの心さしに折そへさせたるは
咲やられて、まつにかゝれるふしなみの花こそ
人のこゝろなりけれども見たまへかし。盛にな
りなは、花の宴すておもふをあらすはいかに
さうくしからん、おこたりはてたまはずとも、
ものしたまへかし。なほ、くはしう大輔か元
よりきこゆへきなり。

〔13丁オ〕

②4

安政五年五月斗り芳久大人の元へ

遣しけり

鶯の初音き、しよりこゝろにかけなから、何くれ
といそくことの侍りて、梅桜もたれこめても侍らねと
え見もやられて折すきぬるを、ほとゝきすのこゑにおと
ろき、山ちかくすませ給ふ御かたのわひしさもまさり
侍るを、君には何事かおはしますらんと、うれしうなん
おもひ給ふる。されと、わかおこたりのつみさり所なく侍る

八七

を、れいのひろき御心にゆるさせ給へかし。はた、民草にものし給ひし風土記二まき、わか、たへとりよせ、したしきものともへとらせ侍りぬ、そのあたひとて十八ひらまゐらせ侍りぬ、いまたきこへたりたき事のいとおほくはへるを、せはき心にまかせ、筆もはしらねは何事もたいめ給はりてこそ。あなかしこ。

さみたれ九日

さの子

よしひさ大人の

御まへ、

②5

おなしく返事

梓ゆみ春たちしよりとはいまさらにひき出んもことふりにたれと、柳桜もいつのまにかをりすきにけん、いかにはへあることの葉をそへ給ふらんとおし斗つ、なん。山ちかきわたりにては、郭公さへさとひたるを、ひかり

(13丁ウ)

ことなる玉章のうへにもらし給へるこゑのいろさへ、いかにありけんさらにおとろかれ侍りぬ。さた、ひと日民草にものせし風土記を、むつたまあへるみやひ男にゆつり給ひて、そのあたひ十八ひらおこせ給て、すなはち書肆へ遣すへうなん、このふみに天の下にたくひなきふることの伝はり来ぬるを、世にしる人もまれになるはうれたきことのきはみなるに、去年よりか、なたこなたと人にもあたへ、しらしめ給へるこゝろはえ

のふかきことえにしへしのふるおのれらか心には、なそへなくうれしうなん。そもく、今はふみ見る道のひらけわたりて、はるかなる西洋のおらんだといふ国の世のはしめのつたへふみにも、国のはしまりは亜細亜よりひらけしよしにつたへ、天竺、またちかきもろこしにても、帝震に出つなといふ伝への有て、いつれの国にても皇国よりひらけはしまりけることはいちしるく、いともくなのめなるましき神代の伝説なるを、なほさりに見すこす人はいかなる心にかとおもひやられ侍れとも、さてはおのれ何はかりのことしたりかほに、人のおもはんことのをやさしくて、た、うちとけたるなからひのみにてなん、あしたゆふへとあちはひ見給へ。(14丁オ)

国ひきまし、ふるもの、いとおほきなる伝へなるに、後世にもこの四郡を浪にうかひ来し心とて、浮浪山なといひつたへたるもをかきき名ならずや。猶おなしこゝろさしならん人

には、ひろくししめし給ひね。此国のひかりを世にてらすのみにあらず、すへて皇国のためはいふもさらなり、いひもてゆかは、四国萬国のためともなりぬへし。さるは、萬国のひらけはしまりしもとつ国の、世のはしめの伝へ書にして、その国しろしめす現人神の大御心によりそをうしなはしはふらましとつたへさせ給へる、御書なればなり。あなかしこ。えみしのたてまつれる千字文や、後やとひとしなみにいふへきふみには

侍らぬをや。あなくたゞしのいひさまや。何事も
うちくにつみゆるしたまへ。さてもめつらかなる
大御酒、その神のかみし御酒いくひさしと

ことほきてかもし給ひけんを、ひとかめおこせ給て、
あこともつとへてたるそのうちもやら、にう
たけし侍らんこと、よろこひ聞へさせんにも、みし
かき筆には中々になん。なほ、むらいのつみは
おしはかり給ひて、ゆるし給へ。あなかしこ。

九日

よし久

さの子君御元に「へ」

②6

おなし比よしのふ君の元より

いふせかるける^{なかし}さみたれの折にも、おもひ給ひられぬ

天気よく侍るを、花たちはなのかくはしき夕風

ともに、めつらかなる此文に見たてまつるたにあるを、
うまこりのうま酒をそ人のためとてめくみ給へる
なん、うれしとも嬉しうおもひ給へる。このかし

こまりはた、ちにまうて、聞へたるへきを、みつくきの
をかのおかしくも侍らぬ返りこと、れいのひろき
御心にゆるさせ給へねかし。はた、古言てい、なほ

ひの御たま、千歳の舎御集ともに三巻いとはやも
御らんしはて給へてかへさせ給へるを、あつさゆみ春
かけておのれにかし給へる胡月抄、いとなくひき
と、め生侍るつみ、さり所なう思ひ給へとも、今少し

見はてぬ所の侍れば、ひと日二日のほとゆるさせ給ね
かし。猶、聞へあけたるへき山々まうのほりてこそ。
「(15丁オ)

十二日

あなかしこく。

「(15丁ウ)

〔付記〕 貴重なご所蔵品の調査をお許しくださった手銭家の皆様、調
査にあたり様々にご教示を賜った手銭記念館学芸員佐々木杏里氏に厚
く御礼申し上げます。

なお、本稿は山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研
究」(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、同「山陰地域の文
学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九～
二〇二一年度、代表・野本瑠美)による研究成果の一部である。

A reprint “Chitose-no-ya-onshosoko”

NOMOTO Rumi and YASUDA Haruka

(Faculty of Law and Literature, Shimane University.

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Shimane University)

[Abstract]

The purpose of this paper is to reprint and introduce of “Chitose-no-ya-onshosoko” owned by Tezen Family Archives. “Chitose-no-ya-onshosoko” is letters written by Senge Takahiko and others, collected and copied by Tezen Sanoko.

Keywords : Shosoku, Tezen Sanoko, Senge Takahiko, Tezen Museum